
愛を込めて。

蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛を込めて。

【Nコード】

N9808T

【作者名】

蒼空

【あらすじ】

平和な世界。平凡な日々。

そんな世界が大好き。

だけど、本当に平凡な日々を送る人などいるのだろうか？誰だって

悩むし、ドキドキする。

しっかり者だけど、どこか鈍く抜けている少女と不器用な少年達が

恋をする。

誰が少女の心を奪うのだろうか？

君への想い。

いつしか、愛を込めて伝えよう…。

第1話 放課後の一時

平凡な日々は
いつか壊れるのだ。

ずっと平凡な人生を送る人なんて、ごくごく一握り。

皆それぞれに嬉しかったり悲しかったり、時にはドキドキするような事件だって起こる。

人生なんてみんな違う……だから、「平凡な人生」など本当は無いのかもしれない。

あたしの、大事な大事な平凡な日々が壊れ始めたのはいつからだろう？

勉強だつて出来るほうで、成績が悪くて教師に説教されることもない。

心配性で、瞬時に怒られそうな事と大丈夫な事を区別しているからなかなか教師に怒られることがない。

周りに嫌な人も居ないし、それなりに友人とは上手くやっていると思う。

他人から見れば十分に良い人生だろう。

平凡が壊れ始めた一番始めのきっかけは、国語係になったことだろうか。

そうなら、あたしは国語係になったことを後悔する。

でも、もっと違うことがきっかけかもしれない。

偶然と偶然、奇跡と奇跡、何かが重なっていけばどこかで小さな摩擦が生じていくだろう。

そして、それはいつしか大きくなっていく……。

20XX年9月10日。

夏休みも終わり、再び賑やかになり始めたこの学校。

今は放課後になり、校庭や体育館から部活動の声が元気良く聞こえている。

この学校は文武両道を掲げている。

夏休み前には先輩達が引退し、代も変わり気合いが入っているのだろう。野球部だろうか。怒声までもが聞こえる。

高校生にもなると大人びた——いや、見た目がおっさん化した男子がいるものだ。そんな先輩に鬼のような形相で怒鳴られてもしたら、後輩達は自分が悪くなくても半べそをかかずにはいられないだろう。

そういう世界だとしても気の毒でならない。

さてさて、それとは反対に二年生の教室があるこの廊下はシンとしている。

かろうじて聞こえる音と言えば、遠くから聞こえているあの怒声やら元気な声やら。

それと、男女二人の話し声だけである。

—— ああ、せっかく今日は何の予定もないオフ日なのに。

帰りに呼び止められてから早一時間半。

勉強を教えてほしいと言われたから一緒に勉強をして、それからたわいもない話をして……

実のところ、そわそわしている。

早く帰りたい。

早く帰って愛犬チャチャの散歩をしたい。

週に五日はあたしが散歩してあげている。

まだ二歳の愛犬はそれはそれは元気に散歩をする。

十分に大人になりきれしていない、子犬独特の愛らしい顔をして見上げてくる可愛さと言ったら…… / / /

ヤバイねっ!!

高2になったあたしと一緒に走り回るのも日常茶飯事だ。子供じゃ

あるまいし、と言われるが、部活をやっていないあたしにとっては良い運動である。

ああ、チャチャ………きっと楽しみに待ってるだろうなあ。

「……………ねえ、ちゃんと聞いてます？」

「……………えっ!？」

はあ、と大きな溜め息をつかれてしまった。
呆れた顔までされた。

まさに意識がチャチャに飛んでいる時だったから、話を聞いているわけがない。

今まで何の話をしていただろう？

考えてみるが、全くもって思い出せない。今のは完全にあたしが悪い……。

ごめんっ……………!!!

「……………ふーん。まあ、いいけどさ。」

あれ、なんか特に責められなかった。いつもならちよつとは愚痴るのに……。

おかしいなと思いつながらも、ごめんねー、と茶目つ気たつぷりに両手を合わせる。――許して下さい。チャチャが大好きなんです。
./././

……ん？チャチャへの愛情が顔に出たかな？

今は横を向いて窓の外へ目がいつているけれど、一瞬だけ、本当に一瞬だけふつと笑われた気がする。
気のせいだろうか？

「……ところでさあ、お前好きなやつとか居るの？」

「えっ、なぜに？」

「今、話聞いてなかったんだろ？その代償にそれくらい教えろよ。というか、教えるのが礼儀だろ？」

面白そうに、頬杖をつきながらニヤニヤしている。
そんな顔して……、このやろー。

はあ、溜め息が出る。

責めなかった代わりにこれね…。
この手の話は嫌なのに。

元々、人生の大イベントみたく、クラスの女の子達と恋愛話で盛り上がることもあまり好きじゃない。
仲の良い子とだけ静かに語り合いたいんだ。

あたしだけかもしれない。

でも、本当に真剣な恋って、この人を好きなのは私だって周りに見せつけたってどうにもならないよね？

それとも、噂を広げたいの？友達に好きになるなよって予防線を引いているの？

……女って自分で気付いてないけど怖いところがある。

でもさ、そういうアピールにしたって、愛し合ってるのはその人も自分を本当に好きでいてくれないとダメなんだ。ある意味、駆け引きであり、タイミング。

噂なんて、いらない…

待っているのは本人から言われる言葉——伝えられる真実の愛だから。

「さあねえ。どうなんだろうねえ。」

曖昧に笑って答えることしかできない。あたしの愛は言うべき時に言うべき人に言うものだから。

「……………ねえ。そっちこそ、どうなの？」

「はい？」

「だから、好きな人居ないの？あたしのを聞くんだから答えなきゃダメでしょね？」

人の顔がどんどん赤くなっていくのを見るのは面白い。絶対好きな人居るんだなあ……………分かりやすいなあ。

「……………ば、馬鹿か。言うわけねえだろ。ばーかばーか!!」

「あ、馬鹿って三回も言わなくていいじゃんかあ！
というか、さっき勉強教えてもらったのはどっちですかー？」

「……………あ？ば、ばかっ……………うるせえよっ」
そう言って机に突っ伏してしまった。

また馬鹿って言ったー。

いいよー、いつでも教えてあげるよー♪なんて、ワックスもあまり付けていない、自然な黒髪頭をぽんぽんしながら言った。

顔は見えないけど、さらに耳が真っ赤になった。男の子としては女の子に勉強を教えてほしくなかったからだろうか。それなら頭の良い友達に教えてもらえばいい。自分だってあたしと学力変わらないのにさ。変なの。

あたしは、どっちかっていうと男子とも仲が良い。

特に今一緒に居る男の子——ナガトリヨウタ長門良太。漆黒の黒い髪を持つ長身の少年である。

あたしは一年生で国語係、二年生になった今は学級委員を務めている。一年生の時、隣のクラスの国語係であった長門とはその国語係がきっかけで仲良くなった。

国語がなんとなく好きだった。だから係になったのだが、一年生の12月頃、放課後に仕事を任された。それは各クラスの国語係がやらなきゃいけない、そこに長門も居たのだ。存在は知っていたけど、話すのは初めてだった。

そして、あの時は素っ気なかった。

いや、誰にでも素っ気なかった長門が変わったのは……いつだ？

「あつ、植木植木！もう帰るか？6時だよ？」

笑顔でそう言う長門に、はっとした。

前は、こんな笑顔なんてしなかった。変わったのはいつからだろう？

長門は、自分をじっと見て何か悶々と考えているあたしに、どうした？と聞く。

あたしは何でもないと答え、教室にある時計を見上げる。

そんなこんなで本当に夕方の6時をまわるらしい。

帰ったら……7時を過ぎるよね。

チャチャ、ごめんよ。

今度一緒に遊ぶから今日は許してね。散歩は明日ちゃんと行くからね。

ちなみに、植木とは愛犬チャチャを愛するこの少女の名前である。

ウエキユズ
—— 植木柚子。

長門と同じく漆黒の綺麗な髪を持つが、胸の辺りまで伸びた髪は緩く波打っている。

顔はいたって普通だが、良く言うならば中の上だろう。そこまでちやほやされるほどじゃない。

だが、礼儀正しさや真面目さからは教師から好印象である。友達思いで、いつも誰にでもニコニコ笑っているところは柚子の人の良さ

を表している。

逆を言えば、その中で柚子に嫌われる子は相当、曲者である。そんな子は絶滅しかかっている動物と同じくらいの希少さだが…。

少々変わってて鈍いところもある。けれど、しっかりしている柚子はみんなに愛されているのだ。

あの後すぐに学校を出た。

帰りは学校から歩いて駅まで行き、途中まで長門と一緒にだった。

あたしは乗り換えだから、そのままの電車に乗っていく長門とはそこで別々になる。

次の電車まで時間がある。

ベンチに座って、買ったイチゴオーレを飲む。

ストローをくわえて一口飲んでから、はあと息を吐く。

この甘さがいい。口いっぱいに広がる甘さは、疲れた身体と脳に糖分を与えてくれる。まさに至福の時だ。

今日は……いつぱい語れたなあ。勉強も頑張るけれど、たまには休憩も必要だよな。

うんうん、とにこやかに頷く。その時の柚子は、本当に幸せそうな顔をしていた。そしてまた一口飲んで、甘さに顔がほころぶ。

そう、平和な日だった。

今、少し離れたベンチに座る栗色の髪の子が、柚子をじっと見ていることに気づかずに……。

第1話 放課後の一時（後書き）

植木柚子——しっかり者な学級委員、だけどどこか鈍い少女。

長門良太——柚子曰くいつの間にか変わってた少年。まだまだ性格は不明。

初めての長編。

誤字脱字。意味不明な文章ごめんなさい。

どうぞこれから宜しく願います。

第2話 幼馴染み

栗色の髪の少年は柚子の方へ真っ直ぐ近付いてきたが、当の本人は誰かが近付いてきていることなんて全く気付いていない。

軽い足取りで歩くその少年の背はそれなりに高い。そして、アイドルと言っても良いほど可愛く、ふわっとした雰囲気を持っている。それでいて、どこか格好良さもあるのだ。『王子様』という呼び方がピッタリだ。

きつと、茶色く大きい瞳を細め、ちよつと微笑めば、年下でも年上でもイチコロだろう。

見た目でいえばパーフェクトなのである。

そんな少年、今は何を考えているのだろうか。微笑んではいる。

微笑んではいるが………悪巧みをするような黒い微笑みにも見える表情をしている。

……………早くに気づいていれば対処があつたのだろう。

少年は柚子の前まで行き、あろうことか柚子の膝の上でちょこんと持たれたままのイチゴオ・レのストローをパクツとくわえた——
柚子が驚いて目を見開いたのは言うまでもない。

だが、少年はそんなのお構い無しだった。

前屈みになってイチゴオ・レを飲んだ体勢のまま顔を上げ、柚子の

顔を見てニコツと満面の笑みを見せている。

その距離、数センチ。

今にもキスしてしまいそうなほど顔が近いが少年は気にしていない。
むしろ、その距離を楽しんでいるようにも感じる。

「わっ、なっ……、」

「んー？」

「……………なっ、何してるのよ！雪夜あ（ユキヤ）！！！」

『雪夜』と呼ばれた少年。そして、顔がすごい近い！と自分の顔が
真っ赤になっていくのが分かって、不本意だと思う柚子。

だけど、座っているせいで後ろに後退りすることは出来ないし、何
しろ目の前に居る人が退こうとしないので動こうにも動けないでい
る。

「んー？あはは、可愛いなあ。柚子、顔真っ赤だよ？」

「……………いいからっ、退いてっ！」

「いやあ、それが人にモノを頼む態度かなあ？」

柚子の顔がさらに、かぁっと赤くなる。

それとは反対に雪夜は、ほんと可愛いなあ、と優しく微笑む。先程

とは変わって、純粹な微笑みだった。

「……………あはは、横に逃げるとか無しだからね？」

柚子は横に少しずつずれようとしていたが、両方の進路を腕で塞がれた。

笑顔の威圧感がなんとも言えない。

ベンチに居るのは、顔を真っ赤にしている少女と、微笑んで少女に覆い被さるようにしている少年。

見ている周りがドキッとしてしまうようなシチュエーションである。柚子自身も、これじゃあ、まるで恋人同士がイチャついてるようにしか見えないよなあ、とか、グルグルしている頭の片隅で冷静な部分が考えていた。

♪ ♪ ♪

あたしは、誰にでも好かれるような笑みを浮かべて呑気に喋る目の前の少年を、もう一度見る——やっぱり顔が近かった。

『白馬の王子様』のような、ふわふわのオーラを纏った馴染みの顔。今は少し意地悪さが見え隠れしているけれど、茶色の瞳をじっと見ていると、吸い込まれそうなほど綺麗だった。

ただ、それよりもあたしは張り付いている『笑顔』に目がいく。

「…………相変わらずの『笑顔』だねえ、雪夜。久しぶりなのに。」

心外だ、とても言う風に雪夜は目をまるくした。

「相変わらずとは何だよ。結構人気だよ？この作り『笑顔』。作ってるのバレないし。気付いて嫌がるのは柚子くらいじゃない？それに、久しぶりなんかじゃないからね。……俺は、毎日柚子を見てる。」

『毎日見てる』というところに別の意味も含まれていたらしいが、柚子は気付いていなかった。

ん？いつ会っただろう？あたしは、きょんとしてしまった。

「うわあ、その顔も可愛い……でも、許さない。そうやっていつも気付かないだろ？相変わらずなのは柚子だ。ホント、しっかりしてそつに見えて時々ぼけーつとしてるところがあるんだから。心配で目が離せないよ。」

何を言うのだろう、この人は。

「そんなことないって。あたし、昔からしっかりしてたもん。ちっちゃい頃はよく『ゆーちゃん、ゆーちゃん』って言って、ついてきたのは『ゆーくん』じゃない。」

「その呼び方は無し、分かりにくい。それに、違う。柚子がどこにでも行くから心配だったんだよ。俺のハラハラしてた気持ち気付いてくれよな。」

「つたく、と呆れたような、少しムスツとしたような、そんな顔が昔を思い出させて可愛かった。あたしは思わずクスツと笑う。ゆうくんは、昔と変わらないねえ」懐かしい。よく三人で遊んだっけ。

「今も遊ぶことはあるけれど、昔ほどではない。あの頃は毎日駆けずり回って遊んでいた気がする。」

あたしと雪夜は幼馴染み。

もう一人『あの子』も居るのだけど、三人はいつも一緒だった。親同士が元々幼馴染みだったらしくて、あたし達も物心がつく前から一緒に過ごしてきた。

友達以上に大切。

「言い換えるならなんだろう。兄弟みたいなもの？
んー、なんだろう？」

「……………おい。ゆうず？」

「えっ？」

「あ、またあたしは考え事をしていて……
ダメだなあ、最近。すぐに周りを忘れて考えちゃう。」

直さないとな…………。

「ねえ、ねえ、このままの体勢でいいの？」

「…え？」

ニコッ

「チューしちゃうよ？」

……は？待て。いや、待ってください。なに？

「違和感無いなら別にこのままでいいけど、そろそろ疲れちゃったんだよね。俺の理性との戦い？」

わわっ、また顔が真っ赤になっていく。普通に喋っていたから忘れてた！イチャついてる体勢のままだった……！！

あたふたと狼狽えるあたしに、今度は雪夜がクスッと笑った。

「馬鹿だなあ、」

今日、馬鹿と言われたのは何回目だろう？
ちよっと悔しい。

「……………柚子って本当心配になる。」

ぼそつと言った言葉は、柚子の耳にも届かず、ホームに響いたアナウンスによって掻き消されてしまうのであった。

♪
♪
♪

「ど、退いて……………」

アナウンスは電車が遅れるというものだった。相変わらず、あたしに覆い被さっている雪夜。そろそろやめてほしい、心臓がおかしくなる。幼馴染みだからといって、男の子であることに変わりはない。あたしだって（一応）普通の女の子なのだから。

「ええー、どうしようかなあ？ドキドキするよね、こーいっの」

まだそんなことを言うか。

ニコニコ、キラキラしてる幼馴染みに対して「はあ…。」と溜め息が出た。

そろそろ本気で怒ろうかな……。

でも、よく考えたらこの体勢だ。雪夜のイタズラ心に火をつけてしまったら、たぶん最悪な方向に……

「はあ……………」

二回目の溜め息。

あーあ、昔からぶざけてこっぴつこつとやるよなあ、困るんだよなあ。どうしたものか。

その時だった。

女神が、やって来た。

腰の辺りまで伸びた、茶色く柔らかそうな髪をなびかせ、優しく微笑むのは女神。

冷たい激怒のオーラを纏った、その女神。

なんと美しいことだろう。冷たいオーラもその美しさをより際立たせている。

短めのスカート、控えめに第一ボタンだけ開けたYシャツ、そこに光るシンプルなネックレス、右耳に光る赤いピアス。その全てが女神を美しく飾っている。

よく、派手な化粧で装飾品を付けてる子もいるけれど、比べようがない。

この女神は派手な化粧でもなく装飾品も控えめなもの。なのに、美しい。女のあたしでも見とれてしまうほど。

「……………ああ、この感じ久しぶりだ…。」

「は？」

思わず発した言葉に、雪夜が反応した。そして後ろを振り返ろうとした瞬間、女神に首根っこを掴まれてあたしから離れていった。

恐るべし、女神の馬鹿力。

やっと雪夜から解放され、あたしはほっとしていたが、雪夜は一瞬ヤバいという顔をした。女神はあまり怒らない。怒っても微笑むから、それに気付くのはあたしと雪夜くらいなのだけど……。

まあ、すぐに微笑みを戻したその雪夜もスゴいと思う。

微笑み合う、王子と女神。

これは絵になる。

最近は滅多に揃わないから、写メったらきつとファンクラブに高く売れる。

うちの学校に存在する、二人のファンクラブに。

「『私の柚子』に、何をしてるんですか？雪夜。」

「いつから、『君の柚子』になったんだ？美雪。俺のだ。」

「あら、そんなの生まれる前からよ。間違っても貴方のものにはならないわ。」

「あはは、俺のだって。柚子と一緒に風呂に入っただのは俺が先だったよあ。」

「うふふ、今でも私は一緒に入りますけど？」

「……………あはは、破滅してしまえ。」

うふふ……、あはは……、と笑う二人。

冷たい空気がその周りで吹雪いている。あたし的にはちょっと恥ずかしい話をされてるのだけど……………

今、近付いたらたぶん凍死します。低温火傷します。危険です。

口喧嘩はさらにヒートアップ。だんだんあたしなんか関係なくなってきた。

「……………大体なあ！！あの時、花瓶割ったのは美雪だろ！？」

「はい？二人の責任だねって和解したじゃないの！！雪夜と遊んでてぶつかったんだもの！！」

「違うね！！俺のせいじゃない。俺の優しさから一緒に怒られてやったんだ！」

「ふざけたことを言わないでっ！昨日だってねえ、……………」

「はいはいはい！！やめよう！二人とも！」

さすがにあたしは止めに入った。昔からだけど、幼馴染みの二人が喧嘩しているのは見てられない。

「いい加減にしなよ？もう。美雪、助けてくれてありがとうね。雪夜、喧嘩しない。相手女の子だから。」

「いーえ、柚子のためだよ。」
と、上機嫌な『美雪』。

「これだけは女の子扱いできない。」
と、怒られて不満げな雪夜。

どちらもあたしの大切な『幼馴染み』だ。

あたしが黒髪なのに対して、二人は茶色の瞳に髪。茶髪なのは地毛だった。染めていると言われることもあるけれど、小さい頃から一緒に居るあたしが言うのだから間違いない。

よく見ると、雪夜は左耳に赤いピアス。美雪とは逆の耳。

たしか、二人は高校に上がってからピアスをし始めたはず。相変わらずかな？

喧嘩こそするけれど、二人は仲の良い『双子』だった。

こんな美形な双子の幼馴染みなんてあたしには勿体ないけど、心から信頼し合ってる。三人で高校も一緒に受けるくらいだもん。美雪とはクラスも一緒に……。

そこであたしは「あれ？」と声をあげた。

「美雪、先に帰ったんじゃないの？」

そうだ、長門と勉強するために学校に残るから先に帰ってもらったんだ。

「え？だって嫌な予感したから。まあ、予想的中ね？」

べー、と雪夜に舌を出す美雪。

「うるさいな。柚子に会ったのは偶然だよ、偶然。本屋寄ったから遅くなったのー。ね？柚子。あ、イチゴオレ美味しかったね♪」

「んー、まあ。雪夜のせいで全部無くなったけどね？」

「もしかして雪夜、柚子の飲みかけ飲んだの？」

「うん♪」

「…………家に帰ったら覚えておきなさい。」

♪♪♪

ゆっくりと電車が近付く。

三人の家は隣同士。

電車に乗って家に着くまで、この賑やかさは続くだろう。

女神様な美雪とは毎日一緒に居るけれど、柚子はこの三人で居るのが大好きだった。

同じ高校だけど、雪夜は遅刻魔だからここ半年は登下校も美雪と二人だ。

ああ、今日は本当に良い日だなあ。

柚子は嬉しそうだった。

第3話 朝は弱い

——久しぶりに三人が揃った次の日の朝。

「「おはよー、柚子」」

「……おはよ」

植木家と天神家はお隣さんである。

天神美雪と天神雪夜という女神様と王子様な二人は双子で、あたしの幼馴染み。

でも、朝からこれはキツイよなあ。なんか久しぶり。

朝は低血圧なあたし。学校へ行くのに家の玄関の扉を静かに開けようとしたら、ドアノブに手をかける前に扉はバツと勢いよく開け放たれた。

犯人はまさしく、朝からテンション高めのこの双子。

「……どうしたの？」

「雪夜が」「俺が」

「早く起きたから」「」

さすがは双子、息ピッタリだね。

二人はあたしとは真逆なのだ。

朝、テンション低めのあたしは登校する間にどんどんそれが上がっていく。

それに対して二人は朝からテンション高めだ。

そして、どんどん仮面を被り始める————本当の微笑みの女神と王子になるのだ。主に、異性に対して。

二人曰く、その方が下手に仲良くなならないから告白も減る、ということらしい。

まあ、ほとんど素だ。違うのは喜怒哀楽が減って、ずっと微笑んで愛想を振り撒くくらい。

美形なりに考えることがあるのだろう。だが、告白されるたびに三人で報告会が開かれているが、第三者として見るあたしは逆効果だと思っている。

だって、告白回数が増えてるんだもん。高校生になってからは余計にね。

まあ、数えてるのはあたしだけで、本人達は気にしてないみたい

だから、あえて言わない……。

♪
♪
♪

未だに登校中。電車に揺られてまゝす。

「そーいえばさあ、柚子？」

「ん？」

そろそろ完全に目が覚めてきたとき、話しかけてきたのは雪夜だった。

「昨日、なんであんな時間まで学校に残ってたの？」

「あれ、言ってなかったっけ？」

「うん。俺は何時間でも本屋に居れるからさ。あの時間だったけど。」

「

「そーいえば、私も聞いてなかったなあ。なんで残ったの？」
と、美雪。

あー、そういえば美雪にも「先に帰ってて」としか言っていなかったなあ……あたしとしたことが、すっかりだね。

「うちのクラスに長門君居るでしょ？ほら、あたし、去年にはもう仲良くなってたから……勉強教えてたの」

「…………へえ。二人きりで？」

「うん、そうだけど？」

あれ、雪夜が微笑みの王子になった。なんで……………あ、そっか。

「大丈夫だよ！雪夜とか美雪ほどトップではないけど、人に少し教えるくらいの頭はあるもん」

「うん。そーだねえ、柚子は勉強できるもんねえ？……アイツも変わらないけどなっ、」

雪夜は頭を撫でてくれた。

んー、撫で撫でしてくれるのはいいんだけど、なんだか機嫌悪そう。やっぱり珍しく早起きするから調子悪くなるんだなあ。うんうん。

そんな二人の会話を美雪は黙って聞いていた。

”長門良太”と言えば、あの無口少年だ。去年、仲良くなったのは聞いた覚えがあつたけれど、もしかして……

「クラスの男の子に聞いてみようかしら……」

「え？ 美雪、何か言つた？」

不思議そうに柚子が尋ねてきた。

「大丈夫。何でもないよ」

笑顔で言う。

長門良太は美雪に一度も声をかけてきたことがない。女神が同じクラスに居れば、男の子が寄ってくるのは当たり前だった。そんな中で、長門だけは美雪の元へ来なかった。

さらに気になるのは言葉を発するだけでも珍しいと噂されるのに、柚子に対しては普通に会話をすることだった。

なんだか気になる。もちろん、柚子には内緒で探らなくちゃ……
…。

長い坂道を上ると、校舎が見えた。多くの生徒が駅から歩いて学校に辿り着く。

靴箱がある生徒玄関に入れば、少しざわつかれるくらい人気のある天神兄弟・女神と王子だった。今日は珍しく朝から一緒に居るから余計に。

雪夜だけは、美雪や柚子と違うクラスだった。といっても、隣のだけ……

ちえ、と悔しそうにしている双子の弟を置いて、美雪は柚子と一緒に教室へと入る。

「おはよう、天神さん、植木さん」

「おはよー！柚子、美雪」

「おはよー！」

「おはよう」

教室に入ると、おはよー、いつものようにクラスの子達が声をかけてくる。私は目立つし柚子は元気でしっかりしてるから、何かとみんなに信頼されていた。

正直、柚子を他の友達に取られたくはない。

幼い頃から一緒に居るからこそ、自分の一番が柚子であるように柚子の一番は自分であってほしかった。

「あ、天神っ！」

後ろから声をかけられ、振り向く。そこに居たのはクラスの男の子だった。

「あのっ！お、おはっ、おはよう、ございます」

「おはよう、とし君」

にこつと微笑むと”とし君”こと今村俊哉は、かあつと顔を真っ赤に染めて嬉しそうに笑った。

「今日も良い天気だね」

「そうね。まだ夏の空が残っているわ」

「雲が……天が綺麗だよね」

「ええ……………」

「え、どうかした？具合悪いの？」

焦るとし君、黒い縁の眼鏡が少しずれた。この人は変わっている、なんで……………」

いや、今はそんなことどうだっていいんだ。誰にでも心から優しくできる人。この人なら、今も一人で読書に励んでいる長門のことを教えてくれるかもしれない。何度か話しているところを見たこと

がある。

「……………あの、とし君？後で時間あるかな？」

「えっ、な、何？」

「聞きたいことがあって……………」

「全然いいよ！僕で良ければ力になるよ」

「ありがとう。昼休み……………は忙しい、かな？」

「んー、昼休みはちよつとなあ…。あの、放課後なんかは？ 今日、僕の部活休みなんだ！」

柚子と帰リたかったけど……………今日はしょうがないか。明日は絶対、一緒に帰ろう。

「いいわ。放課後教室でね」

「うん！じゃあ、また放課後にね！」

嬉しそうに笑いながら、とし君は友達の輪に戻って行った。

横に居たはずの柚子は……………いつの間にか席についていた。窓側の一番後ろの席で、教科書を片手に空を見上げていた。柚子には、何が見えるんだろう。昔から不思議に思う。

時折、ふと目を離すとじっと何かを見つめていた。空だったり、葉っぱだったり、真っ白な雪だったり……………。幼馴染みとして理解はしてるつもりでも、不思議な子だなと思う時がある。しっかりして

るようで、心配になることもするし……いつまでも目が離せないよ、
柚子。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9808t/>

愛を込めて。

2011年10月9日00時56分発行